Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-04-30

非同時的なものの同時性 ： 社会学における非同時性の問題について

梅村，麦生

(Citation)
社会学史研究,42:91-109

(Issue Date)
2020

(Resource Type)
journal article

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90008806

非同時的なものの同時性

——社会学における非同時性の問題について——

梅村麦生

一　はじめに

これまで社会学の時間論では、時計時間に象徴される近代的時間の社会的機能を問うとともに、そこに回収されない「質的な時間」や、集団や関係ごとに異なる社会的時間の多元性について研究されてきた。[1] 他方で現代では、そうした既存の社会学の時間論が、客観的で「量的な時間」と主観的で「質的な時間」を峻別し、かつ自然科学を初めとする他分野での時間概念の発展を十分に顧慮することなく、等し並みに自然的時間や物理的時間を量的時間と同一視し、それと対置させた質的な契機に過剰に傾倒してきたとも指摘されている。[2]

しかし社会学における時間の多元性の主張もまた、相対性理論による絶対的時間の概念の相対化から示唆を受けたものであり、[3] 量的で均質化された近代的時間が技術の発展とグローバル化によって世界中に、そして個人の生活の中にまで浸透したことで、それを基準としてむしろ社会的時間の多元性や、個人の内的時間さえもはっきりと認識されるようになったとも言われている（Kern 1983: 32-5, 313-5＝一九九三：四六―七）。

そうした現代社会における質的・量的契機を含む社会的時間の多義性を当初より問題化していたのが、世代論で提起された「非同時的なものの同時性」の概念である。[4] この概念は、時間の社会学の文脈では十分に論じられてこなかった。[5] そこで本稿では、社会学の時間論に対する意義という観点から、この概念をめぐる議論の系譜を取り上げて追究する。

二　「非同時的なものの同時性」への近年の注目

本稿の背景には、近年のドイツ語圏の文化社会学と隣接分野におけるこの概念への注目がある。例えば、美学（Schneider und Brüggeman 編 2011）や政治学（Walter 編 2016）では近代の時代診断の文脈で「非同時的なものの同時性」の特集が組まれ、『時間と社会』誌でも「非同時性の文化」の特集が組まれている（Brose 編 2004）。その特集の編序でH＝G・ブローゼは、現代西洋社会の社会的時間には異なる速度や異なる時間地平の並存に加えて同時性の増大があり、その同時性の増大には不可避的に非同時性の増大が伴い（同：5）、特に現代の通信技術やグローバル化の進行による同時性の拡大の下で異なる時間性がより尖鋭に現れていると記す（同：17）。別の箇所では「現代社会の諸関係の変化に並行して生じている社会的時間の変化は、その構造と意味論において非同時的なものの同時性として解釈しうる」とも述べている（Brose 2010: 547）。

ブローゼはそこで「非同時的なものの同時性は、時間の観察の根底にあり、時間の構成の中で（歴史的かつ社会の進化と共に変化する形式によって）展開され覆い隠される、そうしたパラドクスである」と規定するが、その際に依拠するのがN・ルーマンのシステム理論である（同：547）。さらに、この概念の学問上での系譜はW・ピンダーによる美術史の世代論に始まり、それをK・マンハイムが社会学の世代論へ接続し、さらにE・ブロッホがファシズムの拡大に直面して時代診断に用いた後は学問を離れて広告や文芸欄の中で普及したが、R・コゼレックらを初めとして歴史科学と文化科学の中では体系的に言及されてきたという（同：555-6）。

この概念の系譜に関して、ブローゼは個別の学説の共通点や相違点、社会学の時間論に関わる論点までは示していない。この概念の特に「非同時性」の含意の広さについては、例えばP・ノルテ（Nolte 2002: 134-5）が「通時的次元」（同一文化内）と「共時的次元」（異文化間）の相違を、またB・ギーゼン（Giesen 2004: 27-33）が「非同時代性＝非現代性」（異なる時代・発展段階の間）、「非共時性」（異なる社会領域の間）、「記憶の分断」（異なる集団の間）という三つの異なる意味を指摘しているが、個別の学説に即した検討は行われていない。そこで本稿では、この概念をめぐる系譜の中で、それぞれ何を問題としてこの概念を用い、その中でどのような相違が現れているのかについて検討したい。

そこでまず、社会現象や出来事の〈意味〉の統一性と非統

一性を時間次元の統一性と非統一性によって表現している点を各議論の共通点と見なす。「非同時的なものの同時性」を提起した世代論の中でも、特にこの概念を普及させたのがマンハイムであるが、彼は世代を具体的な内容や社会的な関係に基づく集団形成とは異なる仕方で統一をなす単位として社会学的な問題と見なした（Mannheim 1928: 170-2 = 一九七六：一六九―七一）。これは後のルーマン（cf. Luhmann 1984: 111-22 = 二〇二〇上：一〇六―一六）による意味概念の規定を用いれば、意味の三次元のうち事象次元や社会的次元ではなく、時間次元による統一を指すと考えられる。さらに、マンハイムが世代の統一は単に同じ年に生まれたことのみによって規定されるのではなく、「現実の社会的な内容や精神的な内容」が諸個人を結びつけている場合にのみ生じうると記したように（Mannheim 1928: 309-11 = 一九七六：一九二―六）、「非同時的なものの同時性」の系譜では、当初からその時間次元の統一性と非統一性が意味の他の次元と結びつけて論じられてきた。その結びつきに関して、学説ごとの相違も生じている。

したがって、以下では上述の共通点を前提としてその相違を見ていくため、①この概念を最初に提起した世代論における同時性と非同時性の発見とそこでの「体験」や「様式」との関係づけ、②歴史的意味論と歴史的時間論における「出来事」と複数の時間性の結びつきの問題化、③社会システム理論における「観察者」の問題の定式化という展開に沿って追究する。そして最後に〈体験時間の多元性の問題化〉という点を時間の社会学に対するこの概念の寄与として提示したい。

三　世代論における「非同時性」の発見

「非同時的なものの同時性」の概念を普及させたマンハイムがロマン主義・歴史主義の立場からの世代論の先駆者として挙げたのがW・ディルタイとW・ピンダーであり、そこからこの概念も提起された。

以下ではこの問題系がどのように浮上したのかを跡づけるため、ディルタイ、ピンダー、マンハイムの世代論を見ていく。そのうえで、彼らがそれぞれ「同時性」や「非同時性」と結びつけたものを確認する。

三・一　世代論における「同時的なものの非同時性」の発見

ディルタイが世代論と「非同時的なものの同時性」の考えに与えた貢献は、質的な「同時性」の発見にある。マンハイム（Mannheim 1928: 163-4 = 一九七六：一五八―九）によれば、ディルタイが画期的であったのは「量的に計りうる」

時間と「質的にのみ把握しうる内的な体験時間」を対照させて世代の統一性を後者に基づかせた点と、「同時性＝同時代性（Gleichzeitigkeit）」が単なる「時系列的＝年代記的（chronologisch）」な意味を超えて、与えられる影響の「同種性（Gleichartigkeit）」から同一の「世代」を構成すると説いた点にある。ここで「世代と世代とを隔てる間隔」が単なる年数計算から「内的に追体験可能な時間」に代わり、「世代の同時性」が存在の「質的な被拘束性」を示すようになったとされる。つまりディルタイによれば、

> 世代は、諸個人が同時代的な関係にあること（*Verhältnis der Gleichzeitigkeit von Individuen*）を示す指標である。いわば相並んで成長した諸個人、すなわち共通の幼年期、共通の青年期をもち、人としての力を発揮した期間が部分的に重なる諸個人を、われわれは同世代と呼ぶ。…多感な年頃に同一の感化を受けた人々は、まとまって一つの世代を形成している。…これらの個人は、多感な時期に起こった同一の大きな事実や変化に左右され、それ以外の要因が異なっていても、一つの等質的な全体に結びつけられているのである。（Dilthey 1875: 124＝二〇〇六：五五八）

したがってディルタイは「世代」について、時間＝時代の区分と体験の共有を結びつけて論じ、社会関係における同時性＝同時代性の意義をそこに見出している。このことがまさに世代を社会学の問題とする土台を提供した。後にM・ハイデガー（Heidegger 1927: 384-5＝二〇一三（四）：二六〇；cf. Mannheim 1928: 164＝一九七六：一五九）はディルタイ上記文献を参照し自らの「世代」と「共にあること（Mitsein）」を現存在の「運命」と規定し、またA・シュッツ（Schütz 1932: 112-3＝二〇〇六：一六三―四）が社会関係の基礎にあるとした「共に年をとること（Zusammenaltern）」としての「同時性」の議論にも関連を見出すことができる。[6]

次いで「非同時的なものの同時性」に関わる世代の「非同時性」の契機を提示したのが美術史家のピンダーである。マンハイムによれば、ピンダーはよりロマン主義の傾向がありつつも、「世代」を「同時的なものの非同時性」として発展させ、特に「同一の時系列上の時間＝年代記上の時代（chronologische Zeit）に様々な世代が生きて」おり、時間＝時代という考えが「多次元的」「多声的」に組織されていることを主張した（Mannheim 1928: 164-5＝一九七六：一六〇―一）。

そのピンダー（Pinder 1926: 11-22＝一九三二：三八―五二）は世代を美術史における一つの問題として取り上げる前段で「歴史的同時性＝同時代性」について問題化し、その中で「同時的なものの非同時性（Ungleichzeitigen des Gleichzeitige）」の考えを提起した。彼はそこで日常では自明視されているが学問上では問題化しうる経験として、「最年少の子供の層から最年長の老人の層に至るまで、きわめて異なる層が実際に同時に居合わせている」という「異なる年代の人々の同時性（Gleichzeitigkeit des verschieden-Altrigen）」（同：12-3＝四〇）を挙げ、さらに「現在時＝今どき（Jetztzeit）」や「近代」のいわば時間被拘束性（同：13-4＝四一―二）や、「時代」が実際にはあくまで「その時代の様式（Stil）」として体験されることに言及した上で（同：16＝四四―五）、「同時的なものの非同時性」についてこう規定した。

> 誰しも同じ年代の人々や異なる年代の人々とともに、同時代の諸可能性に満ちた中で生きている。同じ時間＝時代が各人にとって異なる時間＝時代である。つまり、同年代の人々とのみ共有する自分自身の時代は、それぞれ異なった時代（*Zeitalter*）である。（同：21-2＝五一）

ピンダー（同：22＝：五一―二）はそこから、学問上で「客観的」な時間間隔を、「主観的に異なる諸時間」によって分解した上で綜合し、時間をあくまで「一次元的」にではなく「多次元的」に生じるものとして扱うことで、「隠された〈同時的なものの非同時性〉」について論じうるとしている。さらに「同時代的（gleichzeitig）」と「同年代的（gleichaltrig）」を区別し、前者に対応するものを「時代（Zeiten）」、後者に対応するものを「世代」として、異なるリズム経過をもつ両者が絡み合って「歴史的リズム」が生じてくると見て（同：27＝五八―九）、芸術作品や芸術家にとって「同時代的」は必ずしも「同年代的」を意味しないと注記した上で（同：159＝二二四）、美術史における時間＝時代の問題をこうまとめている。

> 〔歴史的時間の〕相対的な本質とはつまり、芸術家にとっても人間一般にとっても、「唯一の時間＝時代（die Zeit）」が存在するのではなく、「それぞれの時間＝時代（ihre Zeit）」が存在する、ということである。歴史的時点の多次元性という…イメージによって、こうした相対化が各時系列上の単位である「時点」の…違いとして、つまり隠された〈同時的なものの非同時性

(Ungleichzeitigkeit des Gleichzeitige)〉として表現される。…様式を新たに区別する可能性も、その様式が同じ人々や異なる人々によって変化の事象として体験されているのか否かを問うことで生じてくる。(同：163＝二一九―二〇)

以上から、先のディルタイが世代のうちに「体験」と結びつく質的な「同時性」を見出したとすれば、ピンダーはそこに「様式」と結びつく年代ごとの「非同時性」の契機を見出して「同時的なものの非同時性」を提起したと言える。マンハイム(Mannheim 1928: 165-6＝一九七六：一六一―二)は、ピンダーがそれまで「時代精神」や「世紀の精神」と言われる中で強調されてきた「時間＝時代の統一性(Zeiteinheit)」という考え方を、世代と「同時的なものの非同時性」の考えの下で打ち崩したと指摘している。

三・二　「非同時的なものの同時性」への転回と時代診断

マンハイムはディルタイとピンダーの説を受けて、世代論に「非同時的なものの同時性」の考えを導入した。ただし彼は特にピンダーについて、世代の成立に関して生物学的なアナロジーに依拠し「社会的要因」を考慮に入れなかった点を批判し、「生物学的リズム」といえども「社会的事象という領域の中でその力を発現させるはず」であり、社会的要因をまったく無視して「すべてを生命的要因から」引きだそうとする試みに注意を促している(Mannheim 1928: 166-8＝一九七六：一六三―六)。

ここで気づくことは、マンハイムや二次文献も明示していないが、彼の時点で表現が「同時的なものの非同時性」から「非同時的なものの同時性」へと転じ、力点が非同時性から同時性へ移っていることである。村上(二〇一二：六二―七)は、二〇世紀初頭ドイツ語圏での世代論の隆盛の背景に青年神話があり、マンハイムの世代論にも新旧世代を峻別する青年中心主義が見られると指摘したが、社会の急速な変化によって世代間の差異がより鮮明になっていたとも考えられる。その後コゼレックらも「非同時的なものの同時性」を受け継ぎ、ピンダーによる非同時性の発見から、そうした差異の存在を前提とした上で同時性を認識する考えへと移っている。

さらにマンハイム(Mannheim 1935: 13-7＝一九七六：二六―九)は、人間の諸能力の発展には技術的・科学的知識と道徳的・社会的力との間の「一般的不均衡」と、合理性や道徳性に関する集団や階層ごとの「社会的不均衡」の二つの不均衡があると主張し、そこに異なる発展段階の共存を示す表

現として「非同時的なものの同時性」を与えている。つまり、社会の発展段階の差異と結びつける時代診断としての用法である。同時期に「誰もが同じ今（selbes Jetzt）の中にいるわけではない」と述べてナチスの台頭した同時代ドイツの状況を「非同時代性（Ungleichzeitigkeit）」と評したE・ブロッホ（Bloch [1935] 1962: 43-204, 104）＝一九九四：六一―二五六、一二五）がおり、彼はそこで同時代に見られる「様々な非同時代性」、「非同時代的」な残滓や矛盾に言及し、社会の非同時性＝非同時代性を主張した。ブロッホ自身は「同時的なものの非同時性」という表現を用いていないが、この概念を提起した先駆にも数え入れられ（cf. Nolte 2002: 135; Giesen 2004: 27-8; Brose 2010: 555; Kavanaugh編2010: 96-9）、マンハイムの第二の用法と合わせて、この概念が現代の時代診断を示す概念として一般に広まることに寄与した。

世代論に加えて時代診断としての「非同時的なものの同時性」は、文芸や広告にも浸透し現代まで用いられているが、[7] 他方でブローゼ（Brose 2010: 555）も指摘するように、マルクス主義に依拠したブロッホ的な「非同時代性」の強調は、もはや誰しも「時代の高み」に位置しえないポストコロニアルの時代において、まさに時代に適さないと見なされるようにもなった。特に「非同時代性」の主張に「イデオロギー」を見るW・シェーファー（Schäfer 1994: 12-4）は、グローバル史の時代には「非同時的なものの同時性」といった西洋中心主義的な価値基準の下で文化を時間的に格付けする表現は相応しくないと批判し、ルーマン（Luhmann 1990: 95-130）を引いて「同時性とは非歴史的な所与ではなく、一つの歴史的な獲得物である」と注記している。[8]

したがって、世代論と時代診断の「非同時的なものの同時性」の問題点として、どの視点からその「同時性」と「非同時性」を析出するのかが浮上している。これは「非同時的なものの同時性」の観察者とその視点の問題と言える。特に社会の発展段階と結びつける時代診断の用法に批判も寄せられてきた。

ただし、この概念はその後、「出来事」や「システム」と結びつけられる中で、「同時性」や「非同時性」が示す時間性に複数の軸があるということがより明確にされ、観察者の視点の問題にも踏み込まれていくことになる。以下、歴史的意味論と社会システム理論における展開を順に見ていく。

四　歴史的意味論・歴史的時間論における出来事の時間性の問題化

「非同時的なものの同時性」を出来事の複数の時間性と結びつけ、時間的な経験様相としてより一般的な文脈で用いたのがコゼレックの歴史的意味論であり、この概念がその後人文・社会科学で応用される一助となった。[9] その歴史的意味論における展開を見た上で、それと関連する歴史的時間論と社会システム理論の中で同時性と非同時性の観察者の視点という問題系に立ち入っている議論へと進むこととする。

四・一　歴史的意味論における「非同時的なものの同時性」の展開

コゼレックは歴史的意味論の中で、出来事の連関そのものとその記述との双方を指す二つの「歴史」に言及し、その二重の歴史に関わる三つの「時間的な経験様相」の一つに「非同時的なものの同時性」を挙げている。コゼレック（Koselleck 1973a: 213, 1979: 132-3）によれば、第一の時間的な経験様相は、何らかの出来事が生じた際にその以前と以後が分断される「出来事の不可逆性」であり、第二に出来事どうしの特徴づけに同一性が認められる場合に出来事が反復したと見なされる「出来事の反復可能性」であり、そして第三に同じ自然的な時系列の下でも異なった歴史的な継起が存在するという意味での「非同時的なものの同時性」である。その歴史的な継起の中には、行為の担い手や持続の状態に応じて測られる様々な「時間層」と、未来を先取りする予測などを伴う様々な「時間の広がり」が含まれる。そして以上の三つの時間的な経験様相が結びつくことで、「進歩」「退廃」「加速」「遅延」「未だないと最早ない」「先後」「性急と遅滞」「状況と持続期間」といった概念も形成されてきたという。

以上のようにコゼレックは、「非同時的なものの同時性」とその「非同時性」の契機の産出の基礎に歴史的な「出来事」を据えている。彼は歴史的な時間カテゴリーは自然的な時間カテゴリーを前提としつつも自然的な時系列とは異なる時間リズムをもち、自然時間を考慮する中でも「《歴史的》な最小時間」があるとしている（同：213）。[10] 最小時間に関してはジンメル（Simmel 1916: 29＝一九七五：二五一）を引きながら、歴史的な時間系列にも「細分化の閾値」があり、その「最小限の以前と以後」によって構成される「意味単位（Sinneinheit）」としての「出来事」が歴史の最小時間を形成していると説く（Koselleck 1973b: 561, 1979: 145）。そして出

来事は、生じる連関の中で一つの「物語の意味地平」を構成するが、他方でそれを「記述」する段になると、出来事の連続の最中には浮上してこないより長期的な持続を示す「構造」が立ち現れてくる。その意味で、「出来事と構造とは歴史的な運動の経験空間の中で異なった時間的な広がりをもって」おり、それが歴史学の主題となっているという(Koselleck 1973b: 561-3)。

したがってコゼレックは、歴史的な経験様相としての「非同時的なものの同時性」が、同じ「出来事」が同じ自然的な系列の下で「歴史」の異なる系列に繰り入れられることで成立すると考えている。そうすると彼の場合、「同時性」の契機は「自然的な時系列」に委ねられており、他方で出来事が繰り入れられる様々な時間層や時間の広がりを産出する機制が必ずしも自明ではない。

しかしこの問題には、これまで「非同時的なものの同時性」をめぐる研究では注目されてこなかったコゼレック以前の歴史的時間論が取り組んでいる。

四・二　歴史的時間論における二つの時間原理

ディルタイは世代の同時性を体験の共有と結びつけ、ピンダーは時代があくまでその時代の様式として体験されると説いたが、時代を画するものとしての様式に注目したのが近代美術史であり、そこに歴史的時間と世代の問題を結びつけて論じたのがE・パノフスキー(Panofsky 1927: 77-82 = 一九九四)である。

パノフスキーはその補遺を「歴史的(文化)時間」と「天文学的(自然)時間」の相違という「美術史家にとって本能的に自明な事実」から始め、歴史家にとって年号は単なる地球の公転回数ではなく特定の「出来事」や「文化特性」に特徴づけられた時点を意味し、歴史的時間と歴史的空間はそれぞれ継起と並列の相で「意味統一(Sinneinheit)」を、特に美術史においては「様式統一(Stileinheit)」をなしているという(同: 78-80 = 八四―六)。さらに彼は、美術史家にとって直接的な所与は個々の芸術作品だけであり、そうした作品が繰り入れられる一定の歴史的時間と歴史的空間の枠内にある「基準系」としての個人や集団、世代の「様式」が意味連関として「一次秩序」をなし、美術史全体の時間秩序はあくまで事後的な「二次秩序」であるとしている。この箇所の注記で、歴史的空間を軽視したとしつつもジンメル(Simmel 1916 = 一九七五)に同じ考えを見出している。そしてパノフスキー(Panofsky 1927: 81-2 = 一九九四:八七―九)は、同時性にも「自然的同時性」と「歴史的同時性」の違いがあり、「客

観的に同時的なものにおける歴史的な非同時性」やその反対を見出しうるとまとめている。

パノフスキーの考えでは、歴史的時間の下では継起の相に置かれた出来事が意味単位をなし、美術史ではそれが様式として、歴史的空間と併せて美術史の一次秩序を形成している。[11] ここで歴史的時間の「同時性」と「非同時性」は共に意味単位としての様式の産物とされており、その画定は美術史家に委ねられている。

しかし彼は、歴史的な同時性と非同時性を共に自然的時間と対比させ、歴史や美術史全体の時間秩序を事後的に見出される二次秩序と見なした。量的な自然的時間と質的な歴史的時間の単純な対比は、社会的時間の同様の規定に対する批判をも思い起こさせる（cf. Adam 1990: 65-9 = 一九九七：一〇八―一四）。

他方パノフスキーやコゼレックが言及したジンメル（Simmel 1916: 30 = 一九七五：二五二）は、「生じること（Geschehen）」がいかにして「歴史（Geschichte）」になるのかを問う中で歴史学自体に時間に関わる二重の原理を見出している。彼は出来事を歴史の時間体系内に位置づけるためにも、まずその内容が「事象的（sachlich）」「無時間的（zeitlos）」に「理解」されなければならず、「無時間的な理解に基づいてその内容が時間化されるとき、歴史的なものとなる」と言う（同：12 = 二三六―七）。ここで歴史的な出来事は、内容の理解（事象次元での規定）と時系列上への位置づけ（時間次元での規定）の双方が作用し合って成立すると考えられている。しかも、ここでは内容の「無時間的な理解」と言われているが、歴史的な「出来事」それ自体も意味の「単位」として一定の「時間の広がり」と、それ以上分解すると歴史的な出来事としての個別性を失う「細分化の閾値」とをもち、そうした個別性によって歴史上の他の出来事との「先後」関係を示しているとする（同：28-30 = 二五〇―二）。つまりE・トレルチ（Troeltsch 1917: 343-4）が指摘するように、ここでジンメルは歴史的な出来事の個別性について、時系列上での「時間的確定による個別化」と、「内的な連続性と意味統一を理解して把握することによる個別化」という二つの個別化の原理を関わらせ、その「時間測定的な時間」と「歴史的時間」という「二つの時間概念」を共に用いることでのみ歴史学は成立すると見なしている。[12] この二つの時間概念の対比はベルクソンの考察も想起させるが、ジンメルは両者の関わりを「認識論的に解消しえないものと見なしていた」。

トレルチの説明ではジンメルの歴史的時間論も自然的時間との対比に基づく印象を与えるが、むしろ歴史的時間におけ

る出来事の時間次元と時系列との相互的規定と捉えうる。[13] 先のコゼレックはそうした二重の時間性を、歴史が物語られる際の出来事の時間と、それが記述される際の構造の時間との違いと言い表していた。それを「非同時的なものの同時性」の考えに照らすと、同じ出来事が同時に複数の異なる時系列や構造に、また異なる時間性をもつ複数の出来事が同時に同じ時系列や構造に組み入れられることと理解しうる。[14]

以上、歴史的意味論と歴史的時間論で示されたのは、出来事の時間性を析出し、それをより長い時系列や構造に位置づける、そうした観察者によって見出される「非同時的なものの同時性」であった。ただしそれを見出す観察者は、およそ歴史学に携わる者に限られていた。その観察者を一般化し、より広く社会的な領域に適用したのが、ルーマンの社会システム理論である。

五　社会システム理論における「非同時性」の観察者の問題化

ルーマンによる「非同時的なものの同時性」の考えの基礎には、システムの環境からの分出が「システム固有の時間」の分出を伴い（Luhmann 1984: 253-4＝二〇二〇上：二五〇）、「時間とは観察者による構築物である」（Luhmann 1990: 114）とする、時間をシステム相対的なものと捉える時間論がある。

そこでルーマンはシステムが分出に伴って自身に固有の時間を産出する中で、自由にならないのが環境との「同時性」であり、その同時性という時間関係こそがシステムにとってリアリティの基礎となっていると言う（同：42）。彼はこの環境との不可避的な同時性から、「生じるものはすべて同時に生じる」というテーゼをシステムの時間性に関する議論の出発点とし、「同時性はあらゆる時間性に対してあらかじめ与えられている基礎事実である」と見なしている（同：98）。そしてリアリティの基礎としての同時性という見解を別様に表現したものとして、J＝J・ルソー（Rousseau 1959: 1046-7＝二〇一二：一一六）がサン・ピエール島の湖畔で波音を聴くだけで存在の喜びを感じたという「無為（*far niente*）」や「時間を感じさせない状態」の体験と、上述シュッツの「共に年をとること」を挙げている。

しかし同時性は、意味の水準で言えば時間的な差異がないことを指し、それゆえ何かと別の何かの間で時間的な差異がないことを示すために事象的な差異を必要とする。つまり、これは「システム理論的に表現すれば同時性がシステムと環境の分化の一つの側面であり、その分化によって生じるもの

である」ことを意味し、「そうした差異が開けることで初めて、システムと環境が同時（gleichzeitig）に世界の中へと置かれることになる」（同：99）。ここで「同時性」は、自身と外部の区別を行うシステムの働きに不可避的に随伴し、かつ何らかの集合体や統一体の内部にではなく、あくまで外部との関わりの中で体験されると示唆されている。

その同時性を前提とした上で、どのように時間的な差異、非同時性が生じてくるのか。それをルーマン（同：100）は「観察者」の問題と見なし、G・スペンサー＝ブラウンから取り入れた二側面形式的な「区別」と「指し示し」の概念を用いて論じている。つまり、「あらゆる観察者は、ひとつの区別と、区別されたものの一方の（そして他方のではない）側の指し示しとを必要とする」。区別には区別されたものの両側を区切る境界があり、境界を隔てて両側が「同時」に与えられているが、観察はあくまで一度に一側面のみ「指し示す」ものであり、同時に両側を指し示すことはできない（その場合には差異が無効となってしまう）。したがって、区別されたものの事象的な差異を確認しうる「境界の横断」には、一つの「作動」つまり時間が必要とされる。システム理論的には、生じるや否や消滅する「出来事」としての「作動」によって、システムは自身と環境の区別を行い、その作動の回帰的なネットワーク化がシステム固有の時間性を産み出す。さらにその時間性を観察する区別の基礎にも、生じている他の物事との同時性が伴われており、時間に関わる区別は、以前と以後、過去と未来といった非同時的なものを生み出すが、そうした今ならざるものも今においてのみ扱われるという意味で、時間は「非同時的なものの同時性」というパラドクスとして構成される（同：109）。ここでルーマンは、システムによる時間の産出の根底にこのパラドクスがあり、時間的な区別の導入によってそれが展開され不可視化されると主張する。[15] その時間的な区別は、それぞれの社会構造に適応しうる仕方で選択され、そうした時間関係の歴史的な変化に関する研究を進めてきたのが歴史的意味論であるとして、特にコゼレックを参照指示している（同：110）。[16]

このようにルーマンは「非同時的なものの同時性」をシステム一般に拡大し、「同時性」がシステムの内外の区別によって産み出され、その区別と同時性に基づく観察によって「非同時性」が見出されると説いた。非同時性もまた、環境との同時性に拘束されたシステムの現在の作動の下、自身や環境の状態を時間的な区別で指し示すことで観察される。さらに、環境に他のシステムが見出される場合には、ルーマンが時間論の出発点としたテーゼを転じて、「同時に作動するものは

すべて非同時的に作動する」とも言える。ルーマン自身そこに作動上では自己言及的に閉じたシステムどうしの「構造的カップリング」の意義を見ている（同：102-3）。

六　まとめ

「非同時的なものの同時性」の展開の中で、ディルタイは体験の共有と結びつく同時性を世代に見出し、ピンダーは一見すると同時的なものの中に様式と結びつく非同時的なものが多数含まれることを見出した。それがピンダーの表現で「同時的なものの非同時性」であった。「非同時性」の発見も、ピンダーが「歴史的時間の概念」の「相対性」（Pinder 1926: 93＝一九三二：一四三）と述べたように相対性理論の影響や[17]、ブロッホに顕著なように近代化の反省という側面も考えられる。近代化とグローバル化、マスメディアの発展による同時性の拡張が、非同時性の認識をも呼び起こしたと言える。後のコゼレックやルーマンは近代社会における「概念の時間化」（Koselleck [1975] 2006）や「複雑性の時間化」（Luhmann 1980: 235-300＝二〇一一：二一七―七七）を提起し、またコゼレックは進歩／退廃や加速／遅延が近代に成立した歴史的概念であることを指摘したが（Koselleck 1973a: 221, 1979: 143）[18]、そうした進歩／退廃や加速／遅延が社会で認識されたこともまた、この同時性拡張の効果と見なしうる（cf. Brose編 2004: 8; Brose 2010：558-60）。

したがって、時間の社会学が古典的な研究以来（cf. Sorokin and Merton 1937: 627-8）、共通のクロックタイムとカレンダーが社会の機能分化とグローバル化の進展による異なる地域・領域間での交流の拡大によって求められてきたと主張してきたように、この概念もまた、他ならぬコゼレックやルーマンの言う近代社会に特有の、つまり機能分化した近代社会の社会構造と相関する時間的な意味論の一つとも捉えることができる。とりわけマンハイム以降は「非同時的なものの同時性」と言い換えられ、さらに社会の発展段階と結びつけて時代診断の中でも用いられるようになった。

しかし世代論の時点では、誰がどのような視点から「同時性」と「非同時性」を見出すのかという、観察者の問題を明示化できていなかった。その点に時代診断の用法が「イデオロギー」と批判されるゆえんもあった。この問題は、歴史的意味論や歴史的時間論が出来事と結びつく複数の時間性を指摘する中で歴史学の視点の問題として示唆され、そして時間を「観察者による構築物」とするルーマンの社会システム理論において、時間を観察する観察者の視点の問題として一般

化され、時間的な区別を用いて観察を行う際につねに随伴すると見なされるに至った。

以上に関連して、「非同時的なものの同時性」の概念の系譜では、いずれの議論においても、意味の選択を自己の内部と外部のどちらに帰属するかに応じて行為と体験とを区別するとした場合（cf. Luhmann 1997: 334-5＝二〇〇九：三七六）、意味の時間次元の中でも、体験の相における時間次元を問題としていた。本稿では、従来の時間の社会学においては主に行為の時間や機能分化した各システムの作動による時間の多元性とその協調化が問題とされてきたのに対して、そうした体験の相における時間の非統一性、つまり体験時間の多元性を「非同時性」として問題化した点に、この概念による寄与があると指摘したい。この概念は世代や時代というその中にいる者にとっては選択しえない単位の下で提起され、観察者の視点の問題も、この概念が外部からの選択に関わる体験の時間を問題としたからこそ浮上したと考えられる。加えて、行為と体験の間での「非同時的なものの同時性」も考えうる。最後に関しては、歴史的意味論や歴史的時間論が示した出来事と構造の時間性の違い、社会システム理論が示した作動と観察図式の時間性の違いも関わり[19]、さらなる検討が求められている。

註

（1）例えば鳥越（二〇一五：八五―八）を参照。

（2）Elias（1988: XIV-XV＝一九九六：八―九）、Adam（1990: 149-54＝一九九七：二四二―五、1998: 11-9）、Urry（2000: 118-23＝二〇〇六：二〇九―一七）など参照。B・アダムやJ・アーリはニュートン力学の時代の自然科学の時間概念を暗に前提とした社会（科）学の二元論的な時間概念を批判し、自然科学における発展をむしろ参照すべきと主張している。特にアーリは、量子力学から示唆を受けて「瞬間的時間」と、さらに「氷河の時間」の考えを提起している（Urry 2000: 123-130＝二〇〇六：二一八―三〇）。ただし、そうした自然科学に由来するとする時間概念と既存の社会学における時間概念との整合性は、今のところ十分に議論されていない。

（3）特にSorokin and Merton（1937: 618）、Gurvitch（1958: 12-3）を参照。

（4）以下、主にUngleichzeitigkeitの訳として「非同時性」を用い、時代の含意が強い箇所で「非同時代性」とした。後述Giesen（2004: 27-8）はnoncontemporaneityとasynchronicityという二つの英訳を挙げている。

（5）例えばW・ムーア（Moore 1963: 23-5＝一九七四：三四―

七）は社会分化による「時間をめぐる競合」に、真木悠介（真木一九八一：二九五）は「〈生きられる共時性〉の解体を代位する〈知られる共時制〉」に言及するが、異なった時間性を同時に体験することを示す表現は与えていない。

（6）H・ベルクソンから受容したシュッツの同時性概念については、例えば梅村（二〇一六）を参照。

（7）「非同時的なものの同時性」の近年の世代論での言及として、Beck（2016: 188-94 = 二〇一七：二一七—二四）、金子（二〇一三：六—八）がある。伝統と近代の並存を表す広告の用法は、Brose（2010: 555-6）を参照。時代診断には戦後日本でも用いられ（福武・日高一九五二：二八七—八）、統一後ドイツでも東西格差を指す表現として「非同時性」が用いられている（Thierse 1994: 57）。

（8）A・ラントヴェーア（Landwehr 2012: 20-30）は「非同時的なものの同時性」の単数形の「同時性」に時計時間に基づく西洋近代的な「クロノセントリズム」を見出している。

（9）前掲 Schneider und Brüggeman 編（2011）や Walter 編（2016）は特にコゼレックの説に依拠している。

（10）最小時間といえば、知覚心理学の「見かけの現在」（James 1890: 605-42）や「同時性の窓」（Pöppel 1985: 15-22 = 一九九五：一〇—二一）が想起される。E・ペッペル（Pöppel: 1985: 22 = 一九九五：二一）はそこで「同時性の相対性」にも言及している。

（11）ところでR・ムージル（Musil [1921] 1981: 662-3）は、「様式」があくまで後続者が先行者に見出すものであり、二〇世紀の「様式の世代（Stilgeneration）」が自分たち自身の「世代の様式（Generationsstil）」を探し求めるようになったこと自体が一つの問題であると記していた。

（12）廳（一九九五：三八九—四二〇）はジンメルのこの二つの時間を「意味に内在的な時間性」（「事象的時間」）と「歴史的な実在的時間」（「因果の実在的時間」）と表現している。

（13）トレルチ（Troeltsch 1917: 344）はジンメル（Simmel 1916: 30-1 = 一九七五：二五二—三）による生の一形式かつ対立物という歴史把握にヘーゲルとの接点を見出している。ヘーゲル派に関していえば、「非同時代的な歴史」や「過去の歴史」も含めて「すべて真の歴史は同時代（contemporanea）の歴史である」と断じたB・クローチェ（Croce [1917] 1920: 4-6 = 一九五二：一六—九）の歴史認識も想起される（contemporanea はドイツ語版で Gegenwart、邦訳では「現代」と訳されている）。

（14）ジンメル（Simmel 1898: 138 = 一九七五：三三—四）は無時間的な理解による印象統一の例として、現代ローマの空

間的な視覚像の下での様々な「時間＝時代」の共存を挙げている。

(15) ルーマン（Luhmann 1990: 95-130, insb. 117-21）はこの「同時性」とシステムが現在の作動の下で時間を基準に事象・社会次元を考慮する「同期化（Synchronisation）」を区別している。Nassehi（2000: 30, 45）、多田（二〇一三：一六七―七八）も参照。

(16) 他にLuhmann（1984: 375＝二〇二〇下：二八、三〇三（注五四）；1997: 422＝二〇〇九：四八五）など参照。

(17) ピンダーの著作と同時期に美学者J・フォルケルト（Volkelt 1925: 64）も「こんにちでは誰もが時間の相対性について語っている」と記している。

(18) コゼレックは「進歩」など歴史的な概念の「時間化」をもたらした諸概念が一八世紀半ばごろから、つまり彼の言う近代への移行期を指す「鞍（狭間）の時代」に形成されたとしている（Koselleck 1972: XV-XVII）。

(19) 作動時間と観察時間の区別に関しては、Nassehi（2000: 49）を参照。

文献

Adam, B., 1990, *Time and Social Theory*, Cambridge: Polity.（＝一九九七、伊藤誓・磯山甚一訳『時間と社会理論』法政大学出版局）

———, 1998, *Timescapes of Modernity*, Oxford: Routledge.

Beck, U., 2016, *The Metamorphosis of the World*, Cambridge: Polity.（＝二〇一七、枝廣淳子・中小路佳代子訳『変態する世界』岩波書店）

Bloch, E., [1935] 1962, *Erbschaft dieser Zeit*, Erweiterte Ausgabe, Frankfurt a. M.: Suhrkamp.（＝一九九四、池田浩士訳『この時代の遺産』筑摩書房）

Brose, H.-G. (Hg.), 2004, "Cultures of Non-simultaneity," in *Time & Society*, 13(1).

———, 2010, »Das Gleichzeitige ist ungleichzeitig«, H.-G. Soeffner (Hg.), *Unsichere Zeiten*, Wiesbaden: VS.

廳茂、一九九五、『ジンメルにおける人間の科学』木鐸社。

Croce, B., [1917] 1920, *Teoria e storia della storiografia*, 2a ed., Bari: Gius. Laterza & Figli.（＝一九五二、羽仁五郎訳『歴史の理論と歴史』岩波書店）

Dilthey, W., 1875, »Über das Studium der Geschichte der Wissenschaften vom Menschen, der Gesellschaft und dem Staat«, in *Philosophische Monatshefte*, 11.（＝二〇〇六、伊藤直樹訳「人間、社会、国家に関する諸学の歴史研究」牧野英二編『ディ

ルタイ全集 第1巻』法政大学出版局）

Elias, N., [1984] 1988, *Über die Zeit*, hrsg. v. M. Schröter, Frankfurt a. M.: Suhrkamp.（＝一九九六、井本晌二・青木誠之訳『時間について』法政大学出版局）

福武直・日高六郎、一九五二、『社会学』光文社

Giesen, B., 2004, "Noncontemporaneity, Asynchronicity and Divided Memories," in *Time & Society*, 13(1).

Gurvitch, G., 1958, *La multiplicité des temps sociaux*, Paris: Centre de Documentation Universitaire.

Heidegger, M., 1927, *Sein und Zeit*, Tübingen: M. Niemeyer.（＝二〇一三、熊野純彦訳『存在と時間』一—四、岩波書店）

James, W., 1890, *The Principles of Psychology*, Vol.1, New York: H. Holt.

金子勇、二〇一三、『「時代診断」の社会学』ミネルヴァ書房。

Kavanaugh, L. (ed.), 2010, *Chrono-topologies*, Amsterdam: Rodopi.

Kern, S., 1983, *The Culture of Time and Space 1880-1918*, Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.（＝一九九三、浅野敏夫訳『時間の文化史』法政大学出版局［五章までの訳］）

Koselleck, R., 1972, »Einleitung«, in O. Brunner et al. (Hg), *Geschichtliche Grundbegriffe*, Bd.1, Stuttgart: Klett-Cotta.

———, 1973a, »Geschichte, Geschichten und formale Zeitstrukturen«, in R. Koselleck und W.-D. Stempel (Hg.), *Geschichte*, München: W. Fink.

———, 1973b, »Ereignis und Struktur«, in *ibid.*

———, 1979, *Vergangene Zukunft*, Frankfurt a. M.: Suhrkamp.

———, [1975] 2006, »Die Verzeitlichung der Begriffe«, in *Begriffsgeschichten*, Frankfurt a. M.: Suhrkamp.

Landwehr, A., 2012, »Von der Gleichzeitigkeit des Ungleichzeitigen«, in *Historische Zeitschrift*, 295(1).

Luhmann, N., 1980, *Gesellschaftsstruktur und Semantik*, Bd.1, Frankfurt a. M.: Suhrkamp.（＝二〇一一、徳安彰訳『社会構造とゼマンティク1』法政大学出版局）

———, 1984, *Soziale Systeme*, Frankfurt a. M.: Suhrkamp.（＝二〇二〇、馬場靖雄訳『社会システム』上・下、勁草書房）

———, 1990, *Soziologische Aufklärung*, Bd.5, Opladen: Westdeutscher.

———, 1997, *Die Gesellschaft der Gesellschaft*, Frankfrut a. M.: Suhrkamp.（＝二〇〇九、馬場靖雄ほか訳『社会の社会』一・二、法政大学出版局）

真木悠介、一九八一、『時間の比較社会学』岩波書店。

Mannheim, K., 1928, »Das Problem der Generationen«, in *Kölner Vierteljahrshefte für Soziologie*, 7(2-3).（＝一九七六、鈴木広訳「世代の問題」樺俊雄監修『マンハイム全集3』潮出版社）

———, 1935, *Mensch und Gesellschaft im Zeitalter des Umbaus*, Leiden: A. W. Schoff.（＝一九七六、杉之原寿一訳「変革期における人間と社会」樺俊雄監修『マンハイム全集5』潮出版社）

Moore, W. E., 1963, *Man, Time and Society*, New York/London: J. Wiley.（＝一九七四、丹下隆一・長田攻一訳『時間の社会学』新泉社）

村上宏昭、二〇一二、『世代の歴史社会学』昭和堂

Musil, R. [1921] 1981, »Stilgeneration oder Generationsstil«, in *Gesammelte Werke*, Bd.7, 2.Aufl., Hamburg: Rowohlt.

Nassehi, A., 2000, »Tempus fugit?«, in H. Gripp-Hagelstange (Hg.), *Niklas Luhmanns Denken*, Konstanz: UVK.

Nolte, P., 2002, »Gleichzeitigkeit des Ungleichzeitigen«, in S. Jordan (Hg.), *Lexikon Geschichtswissenschaft*, Stuttgart: Reclam.

Panofsky, E., 1927, »Über die Reihenfolge der vier Meister von Reims«, in *Jahrbuch für Kulturwissenschaft*, 4.（＝一九九四、細井雄介訳「歴史的時間の問題について」『芸術学の根本問題』中央公論美術出版［補遺訳］）

Pinder, W., 1926, *Das Problem der Generation in der Kunstgeschichte Europas*, Berlin: Frankfurter.（＝一九三二、神保光太郎訳『欧洲美術史に於ける時代の問題』第三書院）

Pöppel, E., 1985, *Grenzen des Bewußtseins*, Stuttgart: Deutsche Verlags-Anstalt.（＝一九九五、田山忠行・尾形敬次訳『意識のなかの時間』岩波書店）

Rousseau, J.-J., [1778] 1959, «Les rêveries du promeneur solitaire», in *Œuvres complètes*, I, Paris: Gallimard.（＝二〇一二、永田千奈訳『孤独な散歩者の夢想』光文社）

Schäfer, W., 1994, *Ungleichzeitigkeit als Ideologie*, Frankfurt a. M.: Fischer.

Schneider, S. und H. Brüggemann (Hg.), 2011, *Gleichzeitigkeit des Ungleichzeitigen: Formen und Funktionen von Pluralität der ästhetischen Moderne*, München: W. Fink.

Schütz, A., 1932, *Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt*, Wien: J. Springer.（＝二〇〇六、佐藤嘉一訳『社会的世界の意味構成』木鐸社）

Simmel, G., 1898, »Rom«, in *Die Zeit*, 191.（＝一九七五、川村二郎訳「ローマ」『ジンメル著作集一〇』白水社）

———, 1916, *Das Problem der historischen Zeit*, Berlin: Reu-

ther & Reichard.（＝一九七五、川村二郎訳「歴史的時間の問題」『ジンメル著作集一〇』白水社）
Sorokin, P. A. and R. K. Merton, 1937, "Social Time," in *American Journal of Sociology*, 42(5).
多田光宏、二〇一三、『社会的世界の時間構成』ハーベスト社
Thierse, W., 1994, »Fremde im eigenen Land«, in W. Dettling (Hg.), *Perspektiven für Deutschland*, München: Knaur.
鳥越信吾、二〇一五、「時間の社会学の展開」『人間と社会の探究』七九巻
Troeltsch, E., 1917, »Simmel, G. Das Problem der historischen Zeit«, in *Theologische Literaturzeitung*, 42(16/17).
梅村麦生、二〇一六、「A・シュッツの同時性論」『社会学評論』六七巻二号
Urry, J., 2000, *Sociology beyond Societies*, Oxford: Routledge.（＝二〇〇六、吉原直樹監訳『社会を越える社会学』法政大学出版局）
Völkelt, J., 1925, *Phänomenologie und Metaphysik der Zeit*, München: C. H. Beck.
Walter, F. (Hg.), 2016, *Gleichzeitigkeit des Ungleichzeitigen*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.

付記

本稿は、筆者が第六九回関西社会学会大会（二〇一八年六月二日、松山大学）で行った研究報告をもとに執筆したものである。同報告に際して有益なコメントをしてくださった先生方、そして丁寧な査読コメントをいただいた『社会学史研究』二名の匿名の査読者の先生に、記してここに感謝の意を申し上げたい。

なお本稿の引用文中、全体での統一のため邦訳から一部訳語をあらためている箇所がある。また本稿は、ＪＳＰＳ科研費一七Ｊ〇八七二八、一九Ｋ一三九一二の助成を受けた研究成果の一部である。

（うめむら・むぎお　日本大学文理学部助手）